

ピアジェと精神分析

山本政人

1. 精神分析との出会い

20 世紀の偉大な児童心理学者ジャン・ピアジェ (Piaget, J.) はスイスの人である。彼は 11 歳にして白スズメに関する論文を書き、専門家から評価されその非凡さを現した。その後も生物学の研究に熱中していたが、滝沢 (1975) によると、彼の名づけ親コルニュが彼に「創造的進化」の手ほどきをしたことによって認識論に傾倒するようになった。やがて彼は認識論を深めるには実験心理学が必要であると考え、チューリッヒ大学で心理学を学ぼうとした。しかし彼はそれを「あまり有益ではないように思い」、パリ大学に移った。チューリッヒにいたのは数か月であった (滝沢, 前掲書)。

リッヒェベッヒャー (2005) によると、1921 年秋、フロイトの弟子であった精神分析家ザビーナ・シュピールラインはジュネーブでピアジェと出会った。ピアジェはヌーシャテル大学卒業後、チューリッヒで精神分析に関するブロイラーの講義を聴講し、その後 1919 年から 1921 年までパリのソルボンヌ大学で研究を続けた。彼はパリでシモンのもとで知能検査を用いた研究に取り組んだ後、1920 年にスイス精神分析協会に加入し、1921 年、25 歳でジュネーブのルソー研究所に赴任した。そこでシュピー

ルラインと出会ったのである。彼女はピアジェを「貴重な研究者」と呼び、大きな期待を寄せていた。と言うのも、彼女もまた子どもの思考と言語の発達に関心を持っていたからである。彼女はジュネーブ大学で開かれたピアジェの講義と講演に出席したが、ピアジェの講義のタイトルは「自閉的思考」であった。

このタイトルから、ピアジェの研究がブロイラーの説と関係があったことは明白である。ブロイラーはスイスの精神医学者で、「早発性痴呆」の提唱者として知られる。彼は脳の障害から生じる一次障害として連合の障害を想定し、そこから二次症状として「分裂」や「自閉」が生じると考えた。ブロイラーは「自閉」を、内的生活の病的優位により自分にとっての世界に退却することであり、現実機能の喪失を示しているとする一方、「正常現象の誇張」であり発達途上で観察されうるものであるとした（Beauchesne, 1994）。

ピアジェは「自閉的思考」の提唱者であるブロイラーの講義を聴講し、そこから「自己中心性」の概念を思いついたと思われる。初期の著書である『子どもの世界観』（1926）において、ピアジェは子どもの思考は自己中心的であるとし、それは「空想あるいは夢想の自閉的にして象徴的な思考と、論理的思考との中間のようなものである」としている。

ヴィゴツキーは『思考と言語』（1956）において、ピアジェの「自己中心性」とブロイラーの「自閉的思考」の関係について詳述している。ヴィゴツキーは、ピアジェが採用した人間の思考の最初の段階を自閉的思考であるとするフロイトの説は、生物進化の観点と幼児の行動の生物学的分析の観点から誤りであると考えられ、ブロイラーもそのような見解に到達していたとしている。ヴィゴツキーによれば、ブロイラーは自閉的思考を思考の最初の段階とする精神分析学説に関連して、知的障害児において現実的思考と同様に自閉的思考も単純化していることや、動物が自閉的思考を持っていないことを指摘し、自閉的思考を現実的・合理的思考より低次のものであると決めつけるのは誤りであるとしている。したがって、ピアジ

ェが自己中心的思考を自閉的思考と合理的思考の過渡的段階に位置づけたことは誤りであるとヴィゴツキーは主張する。

残念ながらブロイラーがピアジェの自己中心性概念をどのように評価したのかはわからないが、ヴィゴツキーがその代弁をするかのように、ブロイラーの自閉的思考概念とピアジェのそれとの相違についてかなり詳しく説明している。ヴィゴツキーによれば、ブロイラーは自閉的機能の発生を思考発達第4段階に関係づけていた。自閉的思考は回想による論理的思考が可能になった後に出てくるもので、不快な表象に快適な表象を付加することによってそれを除去するものであり、低次の機能ではないとブロイラーは考えていた。柴田（1962）によれば、ピアジェは後にヴィゴツキーの指摘を認め、自身が「子どもの自己中心性」と「精神分裂症の自閉性」の類似を強調し過ぎているというヴィゴツキーの批判を受け入れたということである。

ピアジェがチューリッヒで心理学を学ぶことを「あまり有益ではないと思った」と滝沢は述べているが、それにしてはピアジェはブロイラーの自閉的思考から非常に重要な示唆を得ている。また、スイス精神分析協会に加入していることから、精神分析への関心は決して低くはなかったと思われる。

リッヒェベッヒャー（前掲書）は、シュピールラインがピアジェに大きな影響を与えたことを指摘している。シュピールラインは「幼児語の成立」に関する研究論文を1922年に発表した。その直後にピアジェの『子どもの言語と思考』の初版が刊行されている。その冒頭でピアジェは精神分析学派の研究に言及している。精神分析学派はことばが行為の一部であり、その行為全体の具体的、情緒的内容を呼び起こすことができると考えていた。ピアジェ（1923）によれば、シュピールラインは子どもの言語のごく初期の段階を分析することでそのような現象を発見することに努め、「ママ」と母を呼ぶ時に繰り返す赤ん坊のことばが、乳を吸う行為の延長である発音によって形成されているということを実証しようとした。

赤ん坊の「ママ」は願望の叫びであり、やがてこの願望を充足させることができるということへの命令であるとピアジェは述べている。

ピアジェはシュピールラインの研究がジャネやフロイトらの研究とともに極めて重要なものであるとしているが、シュピールラインについての記述はこれだけである。その後はピアジェや他の研究者が収集した子どもの発話プロトコルとそれに基づく考察が展開されているが、そのベースとなっているのは精神分析的な概念である。特に自己中心的思考の概念は、ブローラーの自閉的思考概念から考え出されたものであることは先に見た通りである。ピアジェ（1926）は自閉的思考について、潜在意識的であり、それが追求する目的、解決しようとする問題は現実的ではなく意識には現れないとする一方、知的思考は意識的であり、意識にある現実の目的を追求するとしている。この両者の中間にあるのが子どもの自己中心的思考であり、これは目的を追求しようとするものでありながら、他者とながらなくという自閉的思考との共通点を持つピアジェは述べている。

ピアジェが精神分析学派から得たものは決して少なくない。それぞれろくか、精神分析学派の研究は彼の初期の研究を方向づけ、大きな影響を及ぼした。にもかかわらず、ピアジェは早々と精神分析学派とは別の道を歩むようになる。彼にそれを決意させたものは何であったのか。ピアジェは精神分析学派をどのようにとらえていたのか。ピアジェは後年のブランギエとの対話の中で次のように述べている。

ブランギエ　実際のところ、どうも先生がフロイト学説を非難なさるのは、根本的かつひどい誤りゆえというより、精緻さの欠如のゆえといえるのではないかという気がします。

ピアジェ　ええ、そうです。私はフロイト学説に深い真実があることを信じているのです。ただ、すべては精錬されなくてはならないし、今日の心理学の光にあてて、再吟味されなくてはならないと思うのです。

ブランギエ　分析にひかれたことはおありでなかったのですか。

ピアジェ　とんでもない。分析を受けましたよ。

ブランギエ　先生が分析を、ですか。

ピアジェ　いいですか。何かについて語る時には、語っていることについてわかっていなくてはなりません。

ブランギエ　先生が分析を…。

ピアジェ　教育分析をフロイトの直弟子の一人に受けました。八か月間、毎朝八時にです。

ブランギエ　ここでですか。

ピアジェ　ええ、ジュネーブで。フロイトの弟子で東ヨーロッパ出身の女性で、フロイトの分析を受けたことのある人です。そう、もちろん私は分析を受けましたよ。でなければ、それについて話したりしませんよ。

ブランギエ　では、どうしてそれをやめてしまわれたのですか。

ピアジェ　私がそれをやめたのは、私が…、私はそこで見たことすべてに興味津津でした。つまり、自分自身のコンプレックスを再発見することはすばらしいことでした…。けれども、私の分析家は、私が理論を受けつけず、彼女は決して私を納得させることがなかったので、もはや続ける必要なしと私に言ったのです。

ブランギエ　ということは、本質的に先生はそれに抵抗されたということですか。

ピアジェ　そうですが、それは理論的にであって、実践においては全然そうではありませんよ。彼女は、国際精神分析学会から、ジュネーブに学説の普及のために派遣されてきていたのです。一九二一年前後のことです。私はというと、モルモットになることに、まったく満足していました。実におもしろかったのですよ。ただ、学説は別問題です。分析家が示したおもしろい事実に対し、私は、分析家が私に押しつけようとした解釈の必然性を感じませんでした。やめたのは彼女の方だったので。 (大浜訳, 1985)

ピアジェが教育分析を受けた分析家こそほかならぬシュピールラインであった。ピアジェによれば、彼が彼女の理論を受け入れなかったため教育分析は終わったが、8か月続いている。リッヒェベッヒャーは、精神分析は数週間から数か月間に亘るものであり、この期間の長さは異例であるとし、次のように述べている。

ザビーナは、ピアジェの研究に関心を向けていたばかりか、彼に対して精神分析を実施したことさえあった。この分析は、彼がジュネーヴに到着して間もない頃から開始され、その後八ヶ月間も続いた。毎日朝八時から、二人はルソー研究所の一室で、笑いを交えながらこの分析を進めたと伝えられている。（中略）彼はこの時のインタビューで、ザビーナ・シュピールラインは、ピアジェを志操堅固なフロイト主義者にするのができなかったために、分析を終了させたと主張している。（田中 訳, 2009）

ブランギエとの対話の中で、ピアジェは8か月間のシュピールラインによる分析を教育分析であったとしているが、ピアジェをフロイト主義者にすることが目的であったとすれば、それは教育分析にとどまらないものであったと思われる。それだけシュピールラインがピアジェに期待していたということであろうし、優秀な研究者であるピアジェと親交を深めるための働きかけであったのかもしれない。リッヒェベッヒャーによると、ピアジェはシュピールラインにとってユング以来の魅力的な男性であり、二人は1922年の国際精神分析会議には連れ立って参加発表し、互いの研究を引用し合ったとのことである。また、リッヒェベッヒャーの著書を訳した田中は、訳注において次のようなエピソードを紹介している。ピアジェは分析中シュピールラインに対し強い母親転移を起し、そのことに気づいて「わかった」と言って面接室から出ていった。ブランギエとの対話の中ではこのエピソードは語られておらず、別のところで語られたようである

が、リッヒェベッヒャーはピアジェとシュピールラインの間に特別な感情があったことを示唆している。

それはともかく、ピアジェは精神分析に対して興味を持っただけでなく、その学説を自らの理論構築に大いに利用したものの、それ以上「深入り」はしなかった。シュピールラインによる分析の終結はその具体的現れと見ることができる。この終結はシュピールラインの方から申し出たとピアジェは述べているが、ピアジェが続けることを望んでいなかったことは容易に推察できる。ピアジェが精神分析にそれ以上踏み込まなかった最大の理由は、シュピールラインから解放されたかったということかもしれない。

一方、シュピールラインにとってピアジェは貴重なケースとなった。当時、精神分析は患者の個性を奪うのではないかという危惧が流布していた。しかしピアジェは分析を受けたにもかかわらず、それに支配されることはなかったとシュピールラインはルソー研究所長のボヴェ宛の手紙に書いている。ピアジェは精神分析の安全性を示す事例となったのである（リッヒェベッヒャー、前掲書）。ピアジェは精神分析から影響を受けたと同時に、限定的にはあるが、シュピールラインを介して精神分析に影響を与えたとすることもできる。

ピアジェはシュピールラインについて多くを述べていないが、初期においては共同研究者のような関係であったと見ることができる。先に述べたように、ピアジェは子どもの言語発達に関するシュピールラインの研究を高く評価しており、シュピールラインはこの時期活発に研究と教育普及活動を行っていた。しかし間もなく彼女はジュネーブでの生活に行き詰まった。シュピールラインは精神分析の普及活動を行っていたつもりであったが、それは精神分析協会から正式に認められたものではなく、ジュネーブで職に就くこともできなかった。彼女は故国であるロシア、革命後のソ連に戻ったが、ソ連では精神分析が禁止され、その後第二次世界大戦が勃発し、彼女はドイツ軍によって拘束、殺害された。精神分析家シュピールラインにとってジュネーブでの日々は生涯で最も充実したものであったと思

われる。ピアジェが彼女について多くを語らなかつたのは、そうした経緯があつたためかもしれない。

2. 精神分析への親近感

ピアジェは精神分析と完全に離れてしまつたわけではなく、むしろ肯定的に評価していた。彼はエヴァンスとの対話の中で次のように述べている。

事実、私は精神分析から多くのことを学んできています。この精神力学的な視点は、心理学を完全に書き換えました。だが、精神分析の未来は、それが実験的なものになつたときに開かれると、私は考えています。（犬田訳、1983）

また、ブランギエとの対話の中で述べていたように、彼は精神分析学説に真実があると考えていた。彼は次のようなことも述べている。

ピアジェ　私の生涯で無くしたのは論文ひとつだけです。それは、植物についてで、つまり私が今でも研究しているベンケイ草についての論説を書いていたのです。とうとう見つからなかつたので、書き直さなければなりません。これは、フロイトのいうラブスス、失錯行為にぴったりあてはまる数少ない例のひとつだと思います。私はそれを無くすようにわざとしたにちがいないのです。というのはその論文は、良い出来ではなかつたからです。

ブランギエ　書き直されたものの方が、より満足のいくものだったのですか。

ピアジェ　ええ、ええ、それはもう。

ブランギエ　どうしてそれが、フロイトのいうことにあてはまる数少ない例のひとつなのでしょう。

ピアジェ　私はフロイトのラプススの解釈、つまり、失錯行為の解釈には賛成しています。ただ、それには自動的なものもたくさんあって、それら全部に無意識の理由があるわけではないのです。ところが、あの場合には明らかに意図がありました。論文がまずかったのに、私はそれを焼いてしまう勇気がなかったのでしょうか、無くすことが、つまり解決だったのです。

ブランギエ　ラプススを別にして、先生はフロイトに全般的には賛成なさっていると言えるでしょうか。

ピアジェ　ええ、抑圧の大筋について、及び、無意識の主要なメカニズムについては、もちろんそうですが、しかし、細部の解釈というのは、これは、これは歴史の再構成のように、あるレベルまでは正しいのですが、それにはある限界があって、それ以上になると、多少とも恣意的に再構成されるようになり、両者の境界がどこなのかわからなくなるのです。（大浜訳、前掲書）

このようにピアジェは精神分析学説に興味を持ちながら、解釈には異議を唱えた。彼は「象徴遊び」の解釈について次のように述べている。

さて、自我に中心化したこの象徴作用は、たんに主体の多様な意識的関心を表現し扶養するものであるにとどまらない。象徴遊びはまた、しばしば、もろもろの無意識的葛藤にもとづいていることもある。たとえば、性的な関心、不安に対する防衛、恐れ、攻撃性ないし攻撃者との同一視などである。これらの場合、遊びの象徴使用は夢の象徴使用と結びついているので、児童精神分析学には遊びの諸材料を利用するさまざまな特殊的方法があるほどだ。（中略）C・G・ユングは、いみじくも、この夢の象徴使用が一種の原始的言語を含むとみなしていたが、このことは、われわれが象徴遊びについてさきほどみてきたことに照応しているし、また彼は、いくつかの象徴が広い一般性を有することを研究し立証

した功績も有する。しかし、なんの証拠もないまま（統制に無頓着なことではユング学派はフロイト諸学派よりなおいっそう著しい）、一般性ということから、先天性および遺伝的原型説へと結着をつけてしまった。（波多野他訳, 1969）

ピアジェはまず「自我に中心化した象徴使用」という表現を用いている。「中心化」は「自己中心性」という術語に代わるものであるが、これは「自己中心性」が正確に理解されないまま論じられるためであるとしている。そしてここでは精神分析学派、とりわけユングを肯定的に評価しつつ、その解釈がエビデンスに基づいていないことを批判している。ピアジェがユングに触れていることも珍しいが、元型説を肯定的に評価していることはさらに意外である。しかしブランギエとの対話の中で、彼は精神分析学派に対して一貫して好意的であり、フロイト学説に深い真実があるとまで述べている。精神分析学派が統制に無頓着であると指摘しているが、彼自身、臨床法に見られるように統制にあまりこだわらない方法を用いている。そのピアジェから見ても精神分析学派は無頓着すぎるのであるが、それでも精神分析学派を否定することなく、そこに真実があるとしている。

統制にこだわらなかったことは、むしろピアジェの強みであると言える。統制にこだわらなかったからこそ、ピアジェは数々の独創的で有意義な実験を開発できたのである。現代の心理学者は統制の厳密さにこだわるあまり、新しい方法を案出することがほとんどない。ピアジェはそれとは対照的に新しい方法を次々と開発した。当時、児童心理学の研究は観察が主流であり、実験的研究があまり行われていなかったということもあるが、ピアジェの実験の独創性は時代を超えたものである。同時代の実験研究として、ゲゼルの双生児の階段登りの実験が有名であるが、この研究は実験条件と統制条件で、双生児のどちらが速く階段を登るか比較するという基本的な実験デザインで、一応統制されており、ゲゼルの主張する成熟優位説のエビデンスとして知られている。一方、ピアジェの実験は実験条件と統

制条件を比較するものではなく、年齢によってパフォーマンスが異なることを示し、それが発達段階の違いであるということを説明することを目的としている。そこでのパフォーマンスの違いは量的なものではなく質的なもので、厳密な統制にこだわる必要がない。そしてピアジェの説明の独創性と合理性が統制の問題を帳消しにしてしまうのである。

精神分析学説は説明の独創性ではピアジェの上を行くが、エビデンスと合理性に欠ける。ピアジェはそれを批判しつつ、エビデンスと合理性にこだわったと思われる。精神分析学説はピアジェにとって他山の石であった。大浜（1994）は、ピアジェにとってフロイト理論の最大の難点は、構築説の観点と発生的説明の欠如であるとしているが、発生的説明はともかく、構築説をフロイト理論に求めるのは酷であろう。ピアジェはフロイト理論に真実があると信じ、それに新時代の心理学の光を当てる必要があると述べたが、自らの研究に心理学と関連諸科学の光を当てた。その結果たどり着いたのが、構築説の観点であり、発生的説明であったと言える。

ピアジェが独創的な研究を行うことができた理由を、ブランギエとの対話の中に見出すことができる。ピアジェは研究の創造性に関するブランギエの質問に答えて次のように述べている。

ピアジェ　何年か前に、バルティモアのジョンズ・ホプキンス大学の学生たちが、創造性に関する一連の講演会を組織し、私も一回講演するよう招かれたことがあります。その時に私は、もちろん子どもの創造性について話したのですが、学生たちは私がどのようにして自分自身の考えを見出したのかを知りたがりました。私はその時まで、この問題についてほとんど考えたことがなかったので大いに当惑したのですが、考えた末、私は三つの方法によっていると彼らに答えたのです。

ブランギエ　三つですか。

ピアジェ　（笑って）ええ、三つです！ 第一に自分の取り組んでいる分野の本は何も読まず、後で読むようにすることです。第二の方法は、

隣接分野の本を最大限読むことです。知能の研究にとって、それは当然、一方で生物学、他方で数学と論理学等と、さらに社会学の分野も含まれることになるわけですし、つまり、自分の取り組んでいるテーマの周辺をすべてということになります。第三の方法は、叩く相手をもつことです。私にとっては、論理実証主義がそれでした。（大浜訳, 1985）

自分が取り組んでいる分野の本は読まず、隣接分野の本を最大限読むというのは、ピアジェの場合、児童心理学の本は読まず、隣接分野の本として生物学や数学の本を読んでいたということであろう。そこから独創的な研究を生み出すことができたのである。そしてこれは現代においても通用する教訓である。同じ分野の文献ばかり読んでいると、新しい発想は出てきにくい。他分野の研究に新しい発想のヒントが隠されていることは珍しくない。ピアジェはもともと生物学からスタートし、哲学や数学などの広範な領域に通じ、心理学の専門性にこだわることなく、発生的認識論という独自の領域を開拓した。そのことからすれば、このピアジェの発言は当然である。

3. 欲求と同化

『子どもの知能の誕生』（1936）はピアジェの中期の代表的著作である。この中には精神分析学派やフロイト説への言及はないが、ピアジェの研究の基本的立場が述べられており、それが精神分析学派への間接的批判となっていると見ることができる。

ピアジェは自分の3人の赤ん坊を観察し、その行動に知性の萌芽を見出した。もちろんこれは当時としては画期的なことであった。ピアジェはまず乳児の吸啜反射に注目した。たとえば次のような観察である。

観察 10 ローラン

ローランはあおむれにねている。食欲は強くない（授乳後まだ泣いていない）。彼の右の頬に乳首をあてがう。彼は正しい方向に向くが、そのとき五〜一〇センチ胸を離す。彼は数秒間そのまま正しい方向を向いているが、あきらめる。ちょっとたってから（彼はずっとあおむけにねて、顔は天井を向いている）、口を動かしはじめる。ただし、かすかに動かす程度である。次に、頭を左右に振って、最後にはちがった方向を向いてしまう。その方向をちょっとさぐってから、泣き顔をし（唇の角が下がる）、また休止。しばらくして再び間違った方向をさがす。そこで再び乳首を右の頬の真中に触れさせるが、反応なし。乳首が唇から一センチのところに触れると、ようやく向きをかえて、乳首をとらえる。（谷村他訳, 1978）

一見ありふれた乳児の吸啜行動であるが、ピアジェはそこに「同化」と「調節」の機能を見出した。そしてこの機能によって、彼が「シエマ」と呼ぶ一連の行動が漸進的に適応し、体制化されていくと述べた。彼はここで「同化」という概念を持ち出し、それが精神発達の根源的な機能であるとする。しかし当時の一般的な見方は、乳児の吸啜の根源に「欲求」があるとする説である。ピアジェはこの説を代表する研究者として、スイスの心理学者でありルソー研究所の設立者であるクラパレードを引き合いに出して批判しているが、「欲求説」の代表はフロイトであろう。ピアジェはそれをよくわかっていたはずであるが、クラパレードに敬意を表したのか、あるいはフロイトに言及することを避けたのであろうか。

ピアジェは欲求概念には二つの難点があるとする。第一に欲求が活動の原動力であるとしても、欲求はその充足に必要な運動をどのように導くのが説明できない。第二に欲求を身体的なものにとどまらず心的なものでもあると考えた場合、それは身体的満足のみにとどまらない複雑なもので、根源的なものとするにはふさわしくないとピアジェは主張する。

欲求はフロイトをはじめ、精神分析学や心理学の諸理論において根源と言える概念である。ピアジェはこれを退け、「同化」を根源であるとし、三つの理由を挙げている。第一に同化は器官的生命活動と心的活動に共通する過程である。第二に同化には心的生活の最も根源的事実である「反復」が含まれている。第三に同化にはその反復メカニズムの中に、能動的活動を受動的習慣から区別する要素、すなわち新しいものと古いものを協応させる要素が含まれている。

ピアジェ自身、同化概念が曖昧であることを認めているが、それを敢えて採用したのは、特に第三の理由にある「能動的活動」が発達を説明する上で必要と考えたからであろう。欲求を満たすだけであれば、同じ行動を反復すれば充分であり、子どもはいつまでも吸啜を繰り返すはずである。ところが、現実には子どもは吸啜から抜け出し、見るシエマ、つかむシエマを獲得し、さらにそれらを協応させた新しいシエマを獲得する。欲求を根源に置くと、同じことの繰り返しから抜け出せないはずで、この概念では発達を説明することができないとピアジェは考えたのであろう。そこで彼は「同化」という概念を根源に置いたのである。ただ、この概念は自己中心性とは異なり、汎用的ではあるものの抽象的で、それがピアジェの理論のわかりにくさにつながっている。自己中心性は誤解されやすいものであったが、同化と調節は理解されにくいものであった。

『子どもの知能の誕生』の訳者の一人である浜田は、ピアジェの同化概念について次のように述べている。

ピアジェが同化をカント的な文脈においてではなく、フロイト的な文脈においてとらえつけていたならば、ピアジェの理論はまったく違った方向に向かっていただろう。しかし実際には、彼はカント的同化説にはつねに忠実であったのに対して、フロイト的同化説からは、その着想を得た最初から遠ざかっていたのである。（中略）ピアジェがこのように最初はフロイトと同一軌道に立ったかにみえながら、実はすでにそ

の最初からその軌道を離れて行かねばならなかったのは、おそらく彼における欲望の概念の貧困さのためである。彼の欲望概念はきわめて抽象的である。消化器が栄養を求め、目が光や形の栄養を求め、シエマがそれにふさわしい対象を求める。そういう欲求でしかない。（浜田, 1994）

ピアジェの言う同化とは、浜田が述べる通り、主体が外部の刺激を求める傾向である。ただ、ピアジェは主体を「シエマ」に置き換えたため、それも誤解を招くことにつながったと思われる。最近の脳科学の文脈で言えば、脳が情報を求める傾向ということになる。

しかしながら、「ピアジェがフロイトと同一軌道に立ったかにみえる」という浜田の見解には疑問が残る。確かに、ピアジェの自己中心性はフロイト学説、直接にはブロイラーの説から発想されたものであった。また、ブランギエとの対話の中で述べていたように、ピアジェは精神分析に興味を持っていただけでなく、その学説を高く評価していた。それらのことから、ピアジェはフロイトに接近したとは言えるが、「フロイトと同一軌道に立った」と言えるかどうかについては検討の必要がある。ピアジェがシュピールラインの教育分析を受けながら、その理論を受け入れなかったことも考慮に入れる必要がある。

浜田は、ピアジェの同化・欲望概念は抽象的で貧困であるとするが、先に見たように、それは発達の原因としての同化・欲望であり、「生の衝動」とでも呼べるものである。フロイトの「イド」に相当するものであるが、「イド」は豊かなものと言えるのであろうか。おそらく浜田が言いたいのは、フロイトが「イド」を包摂した人格全体を考えたのに対し、ピアジェは認知発達の原動力としての同化しか考えなかったということであろう。

日本では、浜田のようにピアジェをフロイトやワロンと比較して、ピアジェは個体発達論で関係性を切り捨てており一面的であるといった見方をする研究者が少なくなかったが、これは基礎研究と臨床研究を比較して、基礎研究はスケールが小さくてつまらないと言っているようなものである。

日本でピアジェに関心を持った者の多くが、幼児教育・保育にかかわる心理学者や教育学者であったということが関係しているのではないかと思われる。

4. 記憶の再構成

ピアジェと精神分析学派との最大の対立点は表象と記憶をめぐる問題であった。ピアジェは『子どもの知能の誕生』において、表象が感覚運動期の完成によって発生することを主張したが、それは精神分析学説の重要な部分を否定するものであった。すなわちピアジェによれば、乳児には母親をはじめとする対象のイメージは未だ存在しないということである。このことについて大浜は次のように述べている。

ところがピアジェによれば、イメージや言語のような記憶を再構成するために必要な道具は、感覚運動知能期の最後にならないと出現しないのである。すなわち、記憶は初めから固定されなかったと考えなくてはならない。ここでも、精神分析学者は、高次の行動に対応する心理学概念を、より低次の行動を記述し説明するのに用いているといえよう。（中略）さらに、「対象リビドー」もピアジェには容認できない概念である。対象が対象として認識されるには、「対象（もの）の永続性」の概念が成立しなくてはならないことは、『子どもの実在の構成』（Piaget, 1937）で明らかにされた通りだからである。（大浜, 1994）

そして記憶の再構成については、ピアジェは次のように述べている。

フロイトは自分たちの仮説によって、記憶のはじめを精神生活のはじめと一致せしめる。なぜ私どもは出生第1年に記憶がないのか。もっと特別に出生第1月に記憶がないのか。しかも愛情的経験においては、と

でも、豊富なのはどういうわけだろうか。フロイト学徒の解答は、そこに抑圧があったのだという。しかし再構成－記憶の理論は、非常に簡単な説明を提供する。幼少時に記憶がないという理由として、その時期にはそれを組織することのできる喚起機構がなかったのだというのである。（中略）2、3才の子どもの記憶は、まだ仮作物語と、正確だが混沌たる再構成との雑然たる結合に過ぎないが、組織立てられた記憶は、全体として知能の進歩とのみ、ともに発達する。（大伴訳, 1967）

これに続いて、幼少期の記憶が作られたものであることの根拠として、ピアジェは自身の経験を紹介している。ピアジェの記憶では、彼は2歳の時、見知らぬ男に誘拐されそうになった。この時、乳母が男に立ち向かってけがをしたが、人が集まってきて男は逃げた。ところが後年、これは作り話であったという乳母からの告白の手紙が届く。ピアジェの記憶は乳母の話からピアジェが作り上げたものであった。ピアジェは「多くの真実の記憶は、疑いなく同じ次第のものである」としている。これは今日で言えば「虚偽記憶」であり、幼少期の「抑圧」の否定につながるものである。ピアジェがそれを指摘していたことは「先見の明」と言えるが、彼の記憶概念は独特であった。彼が扱ったのは、情報処理のリソースとしての記憶ではなく、論理操作によって再構成されるものであった。彼の関心はあくまで論理操作の発達にあり、残念ながら彼の研究は記憶研究に寄与することはなかったが、後に新ピアジェ派と呼ばれる認知心理学者たちによって、論理操作の発達は記憶や方略の発達から説明されるようになった。

ピアジェ（1945）は、抑圧された記憶、無意識的記憶は知能によって再構成されたものであり、フロイト派が知能の問題を考えていないのは遺憾であるとした。しかしここで彼が重視した知能は、感覚運動的知能や論理操作をする知能とは異なるものであり、むしろフロイトの「検閲」もしくは「超自我」に近い概念のように思える。ピアジェは知能が無意識をも支配する上位機能であると考え、それで無意識的象徴を説明しようとしたが、

結局フロイトの説明と大きな違いはないように見える。先に見たように、「同化」についても「欲求」に近似した概念であり、やはり彼は「フロイトと同一軌道に立っていた」と言えるのかもしれない。そしてそのことに気づいたためか、彼は精神分析学派に言及することをやめ、実験心理学的研究に邁進することになる。

もしピアジェが浜田の言うようにフロイトと同じ軌道に立っていたとしたら、数々の実験心理学的研究はおそらく生まれていなかったであろう。その代わりに一人のユニークな精神分析学者が生まれていたかもしれないが、心理学の発展という観点からすれば、そうならなかったことは幸いであった。

引用文献

- Beauchesne, H. (1994). Histoire de la psychopathologie. Presses Universitaires de France. 大原一幸・高内茂訳 (2014). 精神病理学の歴史 星和書店.
- Bringuier, J-C. (1977). Conversations libres avec Jean Piaget. Robert Laffont. 大浜幾久子訳 (1985). ピアジェ晩年に語る 国土社.
- Evans, R. I. (1976). The making of psychology. Alfred A. Knopf, Inc. 犬田充訳 (1983). 現代心理学入門 (上) 講談社.
- 浜田寿美男 (1994). ピアジェとワロン ミネルヴァ書房.
- 大浜幾久子 (1994). ピアジェ理論における精神分析 駒澤大学 教育学研究論集, 10, 29-52.
- Piaget, J. (1923). Le language et la pensée chez l'enfant. Delachaux et Niestlé.
- Piaget, J. (1926). La representation du monde chez l'enfant. Alcan.
- Piaget, J. (1936). La naissance de l'intelligence chez l'enfant. Delachaux et Niestlé. 谷村覚・浜田寿美男訳 (1978). 知能の誕生 ミネルヴァ書房.
- Piaget, J. (1937). La construction du réel chez l'enfant. Delachaux et Niestlé.
- Piaget, J. (1945). La formation du symbole chez l'enfant. Delachaux et Niestlé. 大伴茂訳 (1967). 遊びの心理学 黎明書房.
- Piaget, J. & Inhelder, B. (1966). La psychology de l'enfant. Presses Universitaires de France. 波多野完治・須賀哲夫・周郷博訳 (1969). 新しい児童心理学 白水社.
- Richebächer, S. (2005). Sabina Spielrein. Dörlemann Verlag AG. 田中ひかる訳 (2009). ザビーナ・シュピールラインの悲劇 岩波書店.

柴田義松（1962）. ヴィゴツキーの心理学説について ヴィゴツキー（1956）. 柴田義松訳（1962）. 思考と言語 下 明治図書.

滝沢武久（1975）. フロン・ピアジェの発達理論 明治図書.

ヴィゴツキー（1956）. 柴田義松訳（1962）. 思考と言語 上・下 明治図書.

